

イーディス・ドンビーは「高慢」か

——『ドンビー父子』再考——

角田裕子

はじめに一高慢にさせるもの

本稿の目的は、19世紀イギリスの小説家であるチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70)が 1846年から48年まで、ブラッドベリー・アンド・エヴァンズ社(Bradbury and Evans)から月刊分冊形式で連載した第7番目の長編小説『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1846-48)に登場するイーディス・ドンビー(Edith Dombey)を親子関係の観点から考察し、彼女の特徴を明らかにすることである。『ドンビー父子』の展開が娘フローレンス(Florence)による父ポール・ドンビー(Paul Dombey)の内的変化を軸としている通り、この小説の中心テーマは親子関係である。¹全てにおいて仕事を優先し、家庭を蔑ろにしてきたドンビーは待望の息子ポール(Paul)と死別し、再び息子が生まれることを期待して再婚する。しかし再婚相手のイーディスはドンビーが長年信頼してきた部下カーカー(Carker)と駆落ちしてしまう。不幸に不幸が重なり、ドンビーは家庭を失った後、今までの人生で最優先としてきた会社を無謀な投機により破産させてしまう。ドンビーがこのように全てを失う原因は彼自身の高慢さである。“The earth was made for Dombey and Son to trade in, and the sun and moon were made to give them light.” (DS 12; ch.1)と信じ込み、驕り高ぶったドンビーが自分の思惑通りに進まず全てを失う展開は、『ドンビー父子』が高慢さを批判していることを意味する。そして、その高慢さをどのように改めていくかの答えとして、ドンビーがフローレンスとの関係を見直し、それまで彼女を蔑ろにしてきた過ちに気付くこととしている。つまり、『ドンビー父子』はフローレンスを通して高慢さを克服し、父性を取り戻すドンビーを中心に繰り広げられる小説なのである。では、『ドンビー父子』において高慢さが問題となる人物はドンビーだけなのだろうか。

高慢さでドンビーに引けを取らない人物は彼の再婚相手イーディスである。彼女は、第21章で初めて登場する際に次のように語り手に紹介されて

いる。

Walking by the side of the chair, and carrying her gossamer parasol with a proud and weary air, as if so great an effort must be soon abandoned and the parasol dropped, sauntered a much younger lady, very handsome, very haughty, very wilful, who tossed her head and drooped her eyelids, as though, if there were anything in all the world worth looking into, save a mirror, it certainly was not the earth or sky.

(DS 316; ch.21, emphasis added)

語り手に“proud” (DS 316; ch.31)、“haughty” (DS 316; ch.31)、“wilful” (DS 316; ch.31)という形容詞を使用して紹介されるため、読者はイーディスがドンビーに負けず劣らずの高慢であるとの印象を受けるだろう。実際、彼女は夫ドンビーや実母ミセス・スキュートン(Mrs Skewton)を決して敬うことをせず、彼らは常にイーディスが悩みの種となっていることから、彼女が高慢であることに疑う余地がない。従って、『ドンビー父子』ではドンビーの高慢さだけでなく、イーディスの高慢さにも焦点が当てられていることは確かである。

しかし、イーディスの高慢さはドンビーの高慢さとは異質である。なぜなら、ドンビーの高慢さは傲慢によるものだが、イーディスの高慢さは決して傲慢ではなく、むしろ反抗によるものだからだ。そこで本稿では、イーディスの高慢さはドンビーの高慢さとは異質であるということを前提とし、彼女の高慢さの根本にある反抗に着目する。そして、その反抗に着目すると、イーディスは『ドンビー父子』の中心テーマである親子関係の問題に直結するため、彼女をこの問題にあてはめる。するとイーディスには、従来の議論の的となっていたこととは異なる一面、すなわち母親としての意識を強く持っているという特徴があることを実証する。²なお、イーディスのこの特徴を明らかにするために、『ドンビー父子』の約10年前である1837年から39年まで月刊誌『ベントリーズ・ミセラニー』誌(*Bentley's Miscellany*)に連載されたディケンズの第2番目の長編小説『オリヴァー・

トウイスト』 (*Oliver Twist*, 1837-39)に登場する娼婦ナンシー(Nancy)とイーデイスを比較検討する。これは、ナンシーとイーデイスが実によく似た境遇にいるために比較する価値があると思われるからである。³

1. イーデイスの反抗

まずはイーデイスの反抗を見てみよう。第21章の描写の通り、イーデイスは非常に高慢な女性との印象を受ける。確かに、彼女の行動を観察してみると、彼女が高慢であると言っても仕方がない場面が幾つかあることは事実だ。例として、ドンビーとイーデイスが正式に結婚した後、ドンビーが仕事の関係者を自宅に招いた時のイーデイスの行動を挙げることができる。イーデイスは妻として丁重に客をもてなすことはせず、自分には関係がないとでも言いたげにその任務を放棄する。この妻の態度に夫であるドンビーは、自分は妻にばかりにされたと腹を立てるが、彼の怒りはもつともだろう。イーデイスのこのような身勝手に高慢な態度は、『ドンビー父子』の初めから終わりまで、ドンビーへ従わないことで強調されている。しかし、彼女のこのような高慢さは、あくまでもドンビーへの態度、すなわち表面上のことにすぎないということに注意する必要がある。なぜならイーデイスは、ドンビーの傲慢を示すような言葉は『ドンビー父子』の初めから終わりまで一言も言っていないからだ。彼女がドンビーへ容易に従わない態度は、高慢というよりも彼に対する反抗とみなす方が適切である。では、イーデイスはドンビーに対してのみ反抗しているのだろうか。

彼女の反抗の矛先は、ドンビーへはもちろんだが、むしろミセス・スキュートンへ鋭く向けられており、またその反抗の原因も彼女にある。これは、『ドンビー父子』の中心テーマである親子関係の問題にも直結するので、次節で見てゆくことにする。

2. いびつな親子関係

バーバラ・ハーディーは、イーデイスや『ドンビー父子』の後の作品に登場する彼女と似た女性達について、「彼女達一人ひとは、ある時点までは受け身だが、同時に彼女達が服従するまさしくその社会の力へ敵愾心を

持っている」(Hardy 58)と指摘しているが、イーディスが抱いている敵愾心はミセス・スキュートンのイーディスへの教育法となる。『ドンビー父子』では親子関係が中心テーマだが、その問題の一つが、ドンビーの息子ポールに対する教育法だ。ドンビーはポールを息子としてではなく会社の後継者として育てるため、ポールが何よりも必要としている姉フローレンスと乳母ポリリーを彼から引き離す。そして、会社の後継者としての英才教育を受けさせるために規律と知識偏重の学校へ彼を入学させる。このようにドンビーの思惑にがんじがらめにされたポールは、病弱となり、やがて亡くなる。この展開から、親の誤った教育が生む弊害が子供の犠牲として明らかになる。では、イーディスにあてはめるとどうなるだろうか。

イーディスもポールと同じように親の教育の犠牲となっている。イーディスは良家の男性と結婚できるよう、あくまでも男性の気を惹くためだけの教育をミセス・スキュートンから受けてきた。それに対してイーディスは、反感を持ちながらもその状況をしぶしぶ受け入れてきた。そのようなイーディスは、ポールがドンビーの教育法の犠牲として亡くなり影が薄くなるのとは対照的に、ミセス・スキュートンへ徹底的に反抗することで存在感が増す。ここで注目すべきなのは、イーディスの反抗がより激しくなるのはフローレンスとの出会いからであるということである。フローレンスと出会う前のイーディスは、ドンビーやミセス・スキュートンに対して反抗はするものの、それはどこか投げ遣りな態度からのものだった。しかし、フローレンスとの出会い後は、イーディスの彼らに対する反抗が、ドンビーに対しては駆落ちという形での結婚生活の放棄、ミセス・スキュートンに対しては自分への誤った教育法の執拗なまでの追求という、より行動力を伴ったものへと移る。

しかし、従来の議論では、なぜイーディスの反抗が投げ遣りな態度からこのように現実的な行動へと変化するのか、すなわちイーディスにそのような行動を起こさせるものは何かという問題が見落とされている。それに対する答えは、イーディスの母親としての意識である。『ドンビー父子』はその展開からフローレンスを通して父性を取り戻すドンビーの小説だが、イーディスを中心にすれば、『ドンビー父子』はフローレンスを通して母性

を取り戻すイーディスの小説ということになるだろう。次に、この母親としてのイーディスを詳しく見てゆくために、『ドンビー父子』の約10年前に連載されたディケンズの長編小説『オリヴァー・トゥイスト』に登場する娼婦ナンシーを彼女と比較検討する。

3. ナンシーとイーディス

(1) 彼女達の母性

まずはナンシーとイーディスの共通点を見てゆくことにする。第一に、親あるいは親代わりの人物へ反抗することである。ナンシーは物心がつかない頃から掏摸のフェイギン(Fagin)に養育されてきた。その日常は掏摸を始めとする悪事を働くことであり、彼女は何の抵抗も無く毎日を過ごしてきた。しかし、オリヴァー(Oliver)との出会いでそれまでの人生に疑問を持ち、次第にフェイギンへ反抗するようになる。一方のイーディスは、良家の男性と結婚できるよう、ミセス・スキュートンから男性の注目を浴びるためだけの教育を受けてきた。彼女はそのような扱いに反感を持ちながらも、しぶしぶその状況を受け入れてきた。しかし、ドンビーとの再婚によるフローレンスとの出会いで、それまで押さえてきたミセス・スキュートンへの不満が爆発し、反抗するようになる。

第二に、子供を守ることである。ナンシーは、フェイギンに殴られるオリヴァーをかばったことを皮切りに彼を必死に守るようになる。最終的に、フェイギンを始めとする犯罪者からオリヴァーを完全に引き離すためにナンシーは行動を起こすが、それが仇となり彼女は情夫サイクス(Sikes)に殺害される。ナンシーはオリヴァーを守るために犠牲となるのである。一方のイーディスは、ミセス・スキュートンがフローレンスに近付けないようにすることで彼女を守ろうとする。ミセス・スキュートンは、イーディスが新婚旅行で留守の間はフローレンスを預かりたいと言う。しかし彼女の魂胆を見抜いたイーディスは決して許可しない。『ドンビー父子』が展開するにつれ、イーディスとミセス・スキュートンはフローレンスを巡り、激しく対立する。イーディスは、フローレンスに関してはミセス・スキュートンに一切妥協しないのである。

このように、ナンシーとイーデイスは、親あるいは親代わりの人物へ反抗することと子供を守ることの二点で共通している。つまり、彼女達は単に反抗するのではなく、その反抗は守るべき人物を必死にかばうという母性に基づいた行動と言える。

(2) 彼女達の行動の意味

このように、ナンシーとイーデイスはそれぞれオリヴァーやフローレンスを必死に守っているが、その行動を起こさせるオリヴァーやフローレンスが彼女達に相違点を与えている。次にナンシーとイーデイスの相違点を見てゆくことにする。

ナンシーとイーデイスの決定的な違いは母親あるいは母親代わりとしての役割と行うことができる。これは、オリヴァーとフローレンスの年齢が関係している。まずはナンシーを見てみよう。『オリヴァー・トゥイスト』の冒頭で誕生したオリヴァーは、一定の年齢からは成長しない。つまり、オリヴァーは終始一貫して子供のままである。そのため、ナンシーのオリヴァーを必死に守る行動は母性によるものと考えられなくはないが、母親代わりとしての役割となると、いくらか制限される。オリヴァーとの出会いでそれまでの人生を振り返るようになったナンシーは、“‘I thieved for you when I was a child not half as old as this (pointing to Oliver). I have been in the same trade, and in the same service, for twelve years since; don't you know it? Speak out! don't you know it?’” (OT 133; bk.1, ch.16)と親代わりのフェイギンへ怒りをぶつける。そしてサイクスに殺害される直前、ナンシーは彼に“‘... let us both leave this dreadful place, and far apart lead better lives, and forget how we have lived, except in prayers, and never see each other more. It is never too late to repent. They told me so—I feel it now—but we must have time—a little, little, time!’” (OT 396; bk.3, ch.9)と訴える。ナンシーのこの言葉は、オリヴァーを守るためというより、彼女自身のためである。ナンシーは、フェイギンへは自分を子供らしく養育してくれなかったことの惨めさを訴え、サイクスへは彼への愛情を捨てきれない未練を滲ませながらも、別れを選ぶ決意を示している。つまり、ナンシーは結果的には自

分の身を犠牲にしてオリヴァーを守ったことになるが、その行為は、母親代わりとしてというより、それまでの人生を振り返る、いわば自分探しの延長線上にあったものと解釈するほうが自然なのである。

一方のイーディスを見てみよう。『ドンビー父子』の冒頭で誕生するのはフローレンスの弟ポールであり、フローレンスはその時点では幼い少女である。しかしオリヴァーと違い、フローレンスは『ドンビー父子』が展開するにつれて成長してゆく。彼女はウォルター・ゲイ(Walter Gay)と結婚後は妻となり、息子ポール(Paul)を出産後は母となる。つまり、フローレンスには、娘一妻一母となることで女性としての役割が増えるのだ。そうなるのと、娘フローレンスに対する母親としての役割をイーディスが負うことになるのは自然となる。確かに、ナンシーがフェイギンへしたように、イーディスも自分を子供らしく育ててくれなかったことについてミセス・スキュートンを責める。しかし、フローレンスに出会った後は、二人の口論の内容がミセス・スキュートンのイーディスへの教育法からフローレンスを巡るものへと拡大してゆく。“‘Leave her [Florence] alone. She shall not, while I can interpose, be tampered with and tainted by the lessons I have learned. . . .’” (DS 474; ch.30)というイーディスの言葉は、母親としてフローレンスを守る決意表明と考えられる。つまり、イーディスはフローレンスとの出会いでそれまでの自分の人生に惨めさをさらに感じつつも、その惨めさを母親としてフローレンスを守ることで乗り越えようとしているとも解釈できるのだ。

このように、ナンシーとイーディスには、母親あるいは母親代わりとしての役割で相違点がある。ナンシーがオリヴァーを守るのは、母親代わりとしてというより自分の過去を清算するという意味が強い。一方のイーディスがフローレンスを守るのは、フローレンスに二の舞を踏ませないという母親としての意識からであり、この母親としての意識こそイーディスの特徴となる。子供を守る行動を起こさせる心理が自分と他者のどちらにより強く働いているかが、ナンシーとイーディスを隔てるものなのだ。

4. 母イーディス

このように、ナンシーと比較検討することでイーディスの特徴が明らかになる。イーディスは反抗的な女性だが、フローレンスとの出会いにより母親としての意識を持つようになる。このように母親としてのイーディスに注目してみると、そもそも『ドンビー父子』では、彼女が初めから母親として前面に出ていることに気付くだろう。第21章で、バグストック少佐 (Major Bagstock) はドンビーへイーディスを初めて紹介する。そこで彼はイーディスを、18歳でグレインジャー (Granger) と結婚して息子をもうけるものの、結婚後一年で未亡人となってしまった女性だと説明している。また、その一人息子が4、5歳で水死したことも付け加えている。それに対するドンビーは、イーディスに息子がいたと聞いた時は “a shade came over his face” (DS 322; ch.21)、そして水死したと聞いた時はすかさず “raising his head” (DS 322; ch.21) で反応する。つまり、ドンビーはドンビー父子商会の後継者を再びもうける目的でイーディスを見ているのだ。このように、イーディスは後継者をもうけること、言い換えれば、母となることを初めから期待されている女性と言える。

では、『ドンビー父子』においてイーディスは母親としてどのように描かれているのだろうか。次に、ドンビーの視点とイーディス自身の視点から見えてゆくことにする。まずはドンビーの視点から見てみよう。彼の視点から見てみると、彼の疎外感と怒りを通してイーディスの母親としてのフローレンスへの愛情が分かる。それまで誰に対しても刺々しかったイーディスはフローレンスにだけは優しくなり、その気持ちを “‘... You are dear to me, Florence. I did not think that anything could ever be so dear to me, as you are in this little time.’” (DS 550; ch.35) と素直に話している。そして、フローレンスもまた、イーディスが常に優しく接してくれて自分を愛していることを分かっている。イーディスはフローレンスを心から愛しているため、読者は、そんな彼女を “proud” (DS 316; ch.21)、“haughty” (DS 316; ch.21)、“wilful” (DS 316; ch.21) と形容された人間と同一視することにどうしても違和感があるだろう。ドンビーもイーディスのギャップに気づき、次のような印象を受けている。

As she [Edith] sat down by the side of Florence, she stooped and kissed her hand. He hardly knew his wife. She was so changed. It was not merely that her smile was new to him – though that he had never seen; but her manner, the tone of her voice, the light of her eyes, the interest, and confidence, and winning wish to please, expressed in all – this was not Edith. (DS 548; ch.35, emphasis added)

これは、イーディスと不仲になったドンビーの視点からの描写なので、イーディスのドンビーへの態度とフローレンスへの態度のギャップが、「これはイーディスではなかった」という表現で強く裏付けられている。そして決定的なのは、イーディスがカーカーと駆落ちしたことに逆上したドンビーがフローレンスを殴った時の言葉である。語り手は、ドンビーが “. . . they had always been in league.” (DS 721; ch.47)とフローレンスに言ったとしている。ここでの “in league” (DS 721; ch.47)という表現は、イーディスとフローレンスが親しくしていたことを示す。以前、ドンビーには、死別した前妻ファニー(Fanny)とフローレンスが心からの愛情で結ばれていたため、二人の中には決して入れない疎外感があった。ここで “in league” (DS 721; ch.47)という表現が使われるということは、ドンビーには再び以前と同じ疎外感があったと解釈できる。すなわち、彼は、ファニーとフローレンスにそうであったように、イーディスとフローレンスにも心からの愛情があることを認めているのだ。このように、ドンビーの視点から彼の疎外感と怒りを通してイーディスを分析してみると、彼女は母親としてフローレンスを確かに愛していることが分かる。

次に、イーディス自身の視点から見てみよう。イーディスの視点からは、彼女自身の葛藤を通して母親としての強い意識を読み取ることができる。イーディスとフローレンスは確かな愛情で結ばれているものの、二人の関係が次第に気まづくなってゆく。それは、フローレンスが “. . . You have changed your manner to me, dear Mamma. . . .” (DS 703; ch.47)とイーディスへ言うことから明らかである。これは、イーディスがカーカーと駆落ちする直前のやりとりだ。イーディスが駆落ちするのは、カーカーを愛して

いるからではないことは言うまでもない。⁴彼女は、物心がつかない頃から男性の注目を浴びる存在となるよう教育されてきた。反感を持ちながらもその状況を受け入れてきた彼女は、ミセス・スキュートンと死別して以来、愛情の無いドンビーとの結婚生活に耐えることが限界だったのだろう。駆落ちという強硬手段でドンビーとの結婚生活に終止符を打とうとする。普段は梃でも動かないイーディスが、このような大胆な行動を起こしても不思議ではないかもしれない。しかし、駆落ちを目前に控えた彼女がフローレンスと気まづくくなるということは何を意味するのだろうか。

イーディスがフローレンスへの態度を変えるということは、彼女が、母親として駆落ちすることには抵抗があることを意味する。つまり、イーディスは、個人としては駆落ちに踏み切れても、母親としては踏み切れないのだ。そのような彼女の状態は、個人としての自分と母親としての自分の板挟みと言える。結局イーディスは駆落ちするが、彼女はその行為が“‘The stain upon your name, upon your husband’s, on your child’s. . . .’” (DS 936; ch.61)であることを自覚している。また、イーディスが個人と母親としての板挟みの状態に苦しんでいることは、彼女が駆落ちする時にフローレンスから“‘Mamma!’” (DS 716; ch.47)と呼ばれた時に“‘Don’t call me by that name! Don’t speak to me! Don’t look at me! — Florence!’ . . . ‘don’t touch me!’” (DS 716; ch.47)と言うことから明らかである。駆落ちする自分が、愛する娘フローレンスから“‘Mamma!’” (DS 716; ch.47)と呼ばれることほど母イーディスにとって惨めなことはないのだろう。ここから、イーディスの母親としての強い意識を読み取ることができる。そして決定的なのは、駆落ち後のイーディスが第 61 章でフローレンスと再会した時の会話である。フローレンスはイーディスのことを許してもらうようにドンビーに頼むと言う。その熱心さに感動したイーディスはフローレンスに次のように言う。

‘. . . believe me, upon my soul I am innocent!’ . . . ‘Guilty of much! Guilty of that which sets a waste between us evermore. Guilty of what must separate me, through the whole remainder of my life, from purity and

innocence – from you, of all the earth. Guilty of a blind and passionate resentment, of which I do not, cannot, will not, even now, repent; but not guilty with that dead man. Before God!’

(DS 936-37; ch.61, emphasis added)

「あの死んだ男」とはもちろんカーカーであり、彼とは何の関係も無いということをここでイーディスは強調している。すなわち、駆落ちという世間に非難される行動を取り、「墮ちた女」(fallen woman)となったことは事実だが、フローレンスの母親としては決して肉体は汚れていないことをイーディスは強調しているのだ。このように、イーディス自身の視点から彼女の葛藤を通して分析してみると、イーディスは母親としての意識を強く持っていることが分かる。

おわりに——母性を取り戻す小説『ドンビー父子』

以上、まずはイーディスの高慢さはドンビーの高慢さとは異質であるということを前提とした上で、彼女の高慢さの根本にある反抗に着目した。イーディスはドンビーのような傲慢な言葉を一言も言っていないことを根拠に、彼女の態度はあくまでも反抗の域であることを指摘した。そして、イーディスの反抗を分析するとその矛先は実母ミセス・スキュートンへ特に向けられているため、『ドンビー父子』の中心テーマである親子関係の問題に彼女をあてはめた。すると、イーディスの反抗がフローレンスとの出会い前と出会い後では変化していることに注目し、そのようにさせるものが彼女の母親としての意識であることを指摘した。そして、その意識を分析するためにイーディスと彼女に似た境遇のナンシーとを比較検討し、イーディスの母親としての意識は揺るぎないもので、この意識こそ彼女の特徴であることを明らかにした。イーディスを「高慢」という一言で片付けず、『ドンビー父子』を彼女が母性を取り戻す小説として評価してもよいのではないだろうか。

Notes

- ¹ ディケンズは、ジョン・フォスター宛ての手紙(1846年7月25日付)に『ドンビー父子』の概略を詳しく書いている(*Letters*, Vol.4 589-90)。
- ² フィリップ・コリンズは、『ドンビー父子』の同時代の評価として、多くの論評家がイーデイスを「単なる不可解なもの、または大げさな作り事」と論じていたと指摘している(Collins 89)。
- ³ マイケル・スレイターは、ナンシーとイーデイスがいかに似た境遇にいるのかを指摘している(Slater 260-61)。なお、本稿の第3-(1)節の論点は、スレイターの指摘をもとにしている。
- ⁴ ディケンズは、ジョン・フォスター宛ての手紙(1847年11月19日付)にイーデイスがカーカーを嫌っていることをはっきりと書いている(*Letters*, Vol.5 197)。

Works Cited

- Collins, Philip. "Dombey and Son – Then and Now." *Dickensian* 63 (1967): 82-94. Print.
- Dickens, Charles. *Dombey and Son*. Ed. Andrew Sanders. London: Penguin, 2002. Print.
- _____. *Oliver Twist*. Ed. Philip Horne. London: Penguin, 2002. Print.
- _____. "To John Forster." 19 November 1847. *The Letters of Charles Dickens*. Ed. Graham Storey and K. J. Fielding. Vol.5. Oxford: Clarendon, 1981. 197. Print.
- _____. "To John Forster." 25 July 1846. *The Letters of Charles Dickens*. Ed. Kathleen Tillotson. Vol.4. Oxford: Clarendon, 1977. 589-90. Print.
- Hardy, Barbara. *The Moral Art of Dickens*. London: Athlone, 1970. Print.
- Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: Dent, 1983. Print.

※本稿は、拙稿「『ドンビー父子』における母イーデイス」、『英語英文学論叢』日本大学大学院英語英文学研究会編 33(2012) : 15-22. Print.をもとに、加筆修正したものである。拙稿と異なり本稿では、イーデイスの根本にある実母への反抗に注目することを出発としている。それにより、彼女の母

親としての意識を効果的に実証した。なお、『ドンビー父子』および『オリヴァー・トゥイスト』の引用はそれぞれペンギン版による。本文中では作品名の省略形を使用した。省略形は以下の通りである。*DS: Dombey and Son*, *OT: Oliver Twist*.

出典：『英語文化研究——日本英語文化学会創立 40 周年記念論文集——』
成美堂, 2013, 92-103